

玄海原発のプルサーマルから完全に撤退し、再稼働中止を求めます

2016年10月17日

九州電力(株)代表取締役社長 瓜生道明 殿

玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会
玄海原発反対からつ事務所／プルサーマルと佐賀県の100年を考える会
原発を考える鳥栖の会／今を生きる会／風ふくおかの会
原発知っちょる会／戦争と原発のない社会をめざす福岡市民の会
たんぼぼとりで／東区から玄海原発の廃炉を考える会
福岡で福島を考える会／あしたの命を考える会

去る9月28日、佐賀県議会「原子力安全対策等特別委員会」に出席した九州電力・山元春義取締役は、玄海原発3号機で MOX 燃料を使用するプルサーマルを継続する意向を示しました。

核燃料サイクルの要とされた高速増殖炉の原型炉「もんじゅ」は、1995年、メルトダウン寸前まで至ったナトリウム事故を起こし、初臨界から22年間、実働わずか250日で1兆2000億円もの莫大な予算が投じられ、事故後は毎年約200億円の維持費を要してきましたが、何の結果も残せぬままに、今年から廃炉に向け動き出しました。この廃炉作業には、諸外国の例をみると1000億円以上を費やすことになります。このように、もんじゅ及び六ヶ所工場の再処理も全く見通しも立たない状態にあることは、国の「核燃料サイクル政策」が完全に破たんしていることを示しているに外ならず、この時点でプルサーマルを継続する意向を示すなど、暴挙の発言というしかありません。

そもそも、プルサーマルは使用済みウラン燃料(核のゴミ)を再処理し、抽出したプルトニウムをウランと混ぜて焼結させて出来上がった MOX 燃料集合体を入れて従来の軽水炉で燃やすことで、燃料のリサイクルと言っていますが、核のゴミの中から僅か1%程度のプルトニウムの再使用をするに過ぎず、使えるウラン資源や核燃料の量がリサイクルで循環して使い続けることができるわけではありません。

プルサーマルの中心となるプルトニウムは、核兵器の材料であり、超危険な猛毒の放射性物質です。諸外国の核物理学の専門家からは、制御棒の効きが悪くなり、事故時の放射能被害の範囲は4倍になると警告されています。住民を実験台にしなが、リスクだらけの MOX 燃料を九電が無事に消費できたとしても、使用済み MOX という超猛毒核廃棄物がまた溜まっていきます。その処分方法も明記することもできないという法律違反を見逃すこともできません。

こんな何の意義も見い出せない「プルサーマル」を玄海原発で日本初の商業運転実施するにあたって、住民を賛成誘導するために、やらせ動員して仕込み質問を企てたことを私たちは決して忘れません。説明責任は果たされず、私たちは理解も納得もしていません。また、福島第一原発の破壊された3号機もプルサーマルでしたが、その後の現場検証もされず、プルトニウムの行方は全く明らかにされていません。

今回、九電は玄海3号機において燃料棒193体のうち MOX 燃料をこれまでの16体から2倍の32体に増やして装荷しようとしています。量の変化が質の変化を招き、危険も倍増しかねません。これは佐賀県や関係市町と事前協議、事前了解も必要となる重大な問題です。

なお、九州電力の使用した MOX 燃料はアレバ社のメロックス工場で製造されたものだと確認しています。関西の市民団体の分析では、MIMAS 法によりコジェマ/アレバ社のメロックス工場などで製造された MOX 燃料の製造・品質管理水準は、検査データ不正改ざんをして倒産に至った英国の BNFL 社以下でした。市民はアレバ社へ品質管理データの公開を要求していますが、未だ答えが返って来ていません。アレバ社と同様に九州電力にも、私たちはメロックス製 MOX 燃料の自主検査内容を「安全」の証拠として出すように要求しましたが、公開を拒否されました。原発の基本的な安全性に係る事項について必要な情報公開をせず、安全立証責任も果たさず MOX 燃料を使用し再稼働を企む九州電力という事業者を私たちは全く信用することはできません。

ここに、私たちは九州電力に対し、玄海原発のプルサーマルから完全に撤退し、再稼働を中止するように求めます。

連絡先: 玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会 090-3949-2103